

活動報告

イスラム紀行 in モスク (第四回)

～モスクの長老が・・・～

高橋克彰 (JOCV 15 一般短期)
コンピューター技術：アフマドクフタロ財団

今回はシリアのグランドムフティーであるアフマド・クフタロ師が、突然のことでしたが他界されましたので御報告いたします。2004年8月27日、吐血、その後病院にて手術を行い、28、29日と集中治療室にて治療を行いました。しかし、翌日30日になってまた別の箇所が悪化し、31日最善の努力を行いました。翌9月1日入院先病院にてお亡くなりになりました。享年95歳の大往生でした。

当日は遺体を白い布で頭の先から足の付け根までグルグル巻きにし、冷蔵庫に保管し、世界各国の関係者に連絡を入れ、翌2日、シリアで最も大きいウマイヤードモスクにてお葬式が行われました。あれほど大きなモスクが人でいっぱいになるほどのお客様が弔問に来られ、みんな一緒にお祈りしていました。



お祈りを待つ筆者と現地職員

お客様の中には、クフタロ師の次に著名なアレppoのムフティー、宗教省の大臣、ダマスカスに住んでいると噂のハマスのリーダーなどがいました。その後、街中を歩きながらアブン・ヌールモスクへ移動し、再びお祈りし遺体をモスクの地下にあるお墓に左肩が空を向き、顔がメッカの方向を向くよ

う土葬されました。



ハマスのトップが参列(右)

お墓には、クフタロさんの父、アミン師、息子の計2人が他に埋葬されているようです。その後の3、4日とモスクでは、引き続き追悼のお祈りが行われました。大きな行事としては以上ですが、その後も引き続き世界各国からのお客様、及びが来られました。女性は弔問、墓参りに訪れることはできませんが、葬式、埋葬には参加できなかったり、香典という習慣はなく、人によってはお花を贈与したりするそうです。



お葬式でのお祈りをする直前

一緒にお葬式に参加した林隊員は「貴重な体験でした。日本だと、著名な方が亡くなった時は、著名な方が葬式の場に参加できたりするが、クフタロ師の場合、著名な

方だけでなく、子供から大人まで多くの方が参加していたのと共に、それだけ幅広い方々に慕われていたと感ずることができた。ウマイヤードモスクのような大きな場所でお葬式が行われたこと、またあれだけたくさんの方が来たということに驚いた。」と言っていた。



交通機関もほぼストップ

私は以前、金曜日のお祈りに参加したときにアフマド・クフタロ師に一度だけお会いさせて頂いた。手招きでこっちへおいでと呼んでくれ、近くで話をする事ができた。肩に手を回してくれたり本当に暖かく、まるで自分の孫を見守るような笑顔と雰囲気があった。今回、彼が他界したことが私にとって何か大きな意味があるかと言われるとそれはないかもしれないが、モスクでシリア人が泣いている姿を見ていたり、お祈りを一緒に行っていた時、彼の優しい笑顔や雰囲気、今まで彼が一生懸命、苦勞しながらモスクを大きくしてきたことを思い、悲しくなりました。今後、シリアのグランドムフティーの座は誰になるかわかりませんが、彼がシリアで歩んできたことを含め、シリアまた他国のイスラム社会において彼はたくさんの方の記憶に残っていくと思います。

財団のホームページ <http://www.kuftaro.org/index.html> にお葬式の写真など別途載っています。

ではまた次回。

楽しい！「サオリーニ*」攻撃

田中 香織
総務部 広報室

「サオリ、サオリーニ！」「ヤバーニー？」と、みなさんもカメラを手に町や職場を歩いていると声をかけられると思います。フォトグラファーの沼田早苗先生と私がシリアに滞在した1週間、この「サオリーニ攻撃」一色でした。でも、この攻撃を楽しくかわし、時には要望に応えつつ、とても充実した撮影を終えることができました。

私はJICAの広報室で、写真パネル、パンフレット、広報誌などに使う写真をよく見ます。プロの写真家が撮った人々の表情を見ながら、大きなカメラを構えている相手に向かって、どうしてこんな笑顔ができるんだろう、と不思議に思っていました。初めて写真家の撮影に同行して、なるほどと思うことも多く、ぜひ皆さんにもお伝えしたいことを書いてみます。



野菜スーク（市場）での撮影

沼田先生からは、とにかく「いい人」オーラがでています。「写真撮っていい？」と聞きながらニコニコと被写体に近づき、撮った後は「Good! Thank you!」とお礼を言う。パン屋を撮影したときは、パンを、なすを収穫している農民を撮影しているときはなすを、シリア人は気前よくくれますが、それを必ず食べて(しかも全部)「おいしい!」そして相手が喜んだところをもう一枚。

難しいけれど、人が入っている写真はやはりいいです。沼田先生が得意なのは、人物写真です。長

い間「財界」という雑誌の表紙に登場する色々な企業の社長さん達を撮ってこられました。そのせいか、海外の取材でもやはり人を撮影するのがお好きです。「遺跡や建物なんか、人が入るとスケール感が出ていいのよね。」シリアは豊かな農業国、というイメージの写真が欲しいという長澤所長の希望もあって、ひまわり畑を撮ったときは「どこの国のひまわりかわからないわね・・・」と言って、通りがかりのハッタをかぶったおじさんをモデルに起用。「これでシリアらしさが出たわね。」



豊かな農業国、シリア

撮影は、シリアの人々や暮らしとシリアでのJICAの活動とおよそ1:1の割合で行いました。JICAの活動を撮影するときは、専門家やボランティアの活動に後で支障が出ないように、最大限の配慮をしてくださいました。瀧本専門家と安江さんが活動しているCBRを取材に行ったとき、1日目に活動している3つの村のうち、2つの村で撮影をしました。「3つ目の村、行きますか？」と言われたとき、うーん、1日目ですいぶん撮影もできたしな・・・3つ目の村はキャンセルしてもいいかな・・・と思わず私はしてしまったのですが、「瀧本さんは3つの村に公平に接することを大事にしている、と言っていたし、やっぱり3つ目も行きましょう。」と沼田先生。後で瀧本さんと安江さんに聞いたら、「来てもらってよかった～」とのこと。気持ちよく撮影すると同時に、撮

影される人も気持ちよくいられる心配りも、大切だなと改めて実感できました。



村の人は写真大好き

変な話ですが、シリアでは写真を撮った代わりにお金をくれ、という人が全くいませんでした。他の国だとわりとよくあるのですが(まあ、のりくらりと断るのですが)、シリア人はピクニック好きだとか、食べるのに困っていない、などの説明を聞いて、そういう余裕・心の豊かさがいいなあと思いました。沼田先生の撮られた写真にもそれが出ていることと思います。後日、事務所に今回の写真パネルや写真を送りますので、ご期待下さい!

フォトコン締め切り迫る!

最後に宣伝です。沼田先生はJICAの国際協力フォトコンテストの審査委員長をされています。国際協力部門・一般部門とあり、さらに地域別に入賞作品を決めるのですが、中近東からの応募は、写真が撮りにくい国が多いのか、とても少ないのです。今年のフォトコンは、もう締め切りが来ていますが、ぜひみなさんもシリア人の「サオリーニ」攻撃に応じて、いい写真を撮ってどんどん応募してください。デジタル部門もありますので。

* サオリーニ:「写真を撮って」という意味のアラビア語・・・ですね?



筆者(左)と沼田早苗写真家

充実したシリア再訪

- たった8日間の滞在が、一ヶ月に感じられる程に -

松田よしみ(元 JOCV 6-2)

体操競技(タルトゥース)

日本では秋、シリアでは夏にあたる9月下旬、約8年ぶりにシリアを訪れました。

出発前は、「十年一昔」というだけあって、シリアはどのように変わっているのか？シリア人の友人たちには逢えるだろうか？という期待と不安があり、また、海外旅行自体が久しぶりのため、一人で飛行機に乗り、シリアへ無事入国できるのかという更なる不安もありました。今年に入ってから、日本のニュースでは、中近東であるシリアは 危険な国 という印象が以前より強く、様々な不安を抱えたままの出発となりました。(…美花ちゃん！アビール！頑張るって行くから待っててね～！)

やっぱり、首都ダマスカス！

ドバイで乗り換え、機内のアラビア語放送、アラビア語新聞、映画「ハリーポッター」のアラビア語字幕、機内食(アラブ料理)など、飛行機の中から雰囲気はすっかり「アラブ色」でした。そして、ダマスカス空港に降り立ち、手続きを待っていると気のせいかわたタバコの香りがして、なぜかホッとする自分におかしくなりました。空港到着は夕方4時でしたが、日差しはまだ強く、車の開けた窓からの風は乾燥していて、まるで「ドライヤーの熱風」のようでした。

町の中に入ると、車の交通量の多さ、新しいビルや新しい店、女性の服装(スカーフを被っていない人、背中が見え隠れしている人!)など、近代化している様子が様々なところでみられました。タクシーの中は、以前のようにハートの飾りや赤や緑といった電気の装飾などの派手な内装はなく、アラビアの音楽が大音量で流れているだけでした。一番驚いたのは、隊員の生活の変化です。携帯電話が支給されており、eメール(インターネット)での連絡・報告、

首都や地方に関係なく住居には、電話はもちろんテレビや洗濯機も必ず備え付けられているとのことです。(隊員時代は家に電話がなくて、事務所からの連絡を大家に取り継いでもらったり、同じ任地の隊員の家まで直接出向いて連絡網を回していたのに...)

一見、ダマスカスは凄まじい発展をしているかのように見え、私はまるで浦島太郎になったようでしたが、その中でも、変わらないと感じたことも多々ありました。突然停電になったり、二車線の道路に三台以上の車が並列に走っていたり、タクシーで法外な金額を要求してきたり、道を歩くと猫を呼ぶように「プスプス」と言って人を振り向かせようとしたり...。しかし何よりも、シリア人の優しいところが変わっていなかったことは嬉しい限りでした。



旧知の関係者と、筆者(中央)

ここで今回の訪問で出会った一部の「優しい人」を挙げてみます。

優しい人その一。空港で入国手続きに並んでいたら「外国人は、ここじゃなくて、あっちだよ」と教えてくれました。(これくらいは、誰でも教えてくれるよね。でも、不安な私には嬉しかったのです。)

優しい人その二。タクシーに乗ったら、お金は要らないと言われました。隊員時代にも、そういうことは多々ありました。(これこそシリア！でも、最終的には、料金を渡すと照れくさそうに受け取ったんだけど...。)

優しい人その三。目的地に行く

途中ではいつも少なくとも2~3人は、手助けをしてくれました。「自分は英語を話せるから」と紳士的に話しかけてくれ、助かりました。(単に日本人の女性が一人であらうろろしていることが珍しいといえば、それまでだけど...。)

やっぱりシリア人は昔のままで、シリアの変化はゆっくりしか動いていかないアラブ時間の中の出来事なのだなあと感じました。

第二の故郷？タルトゥース

「隊員時代に一番仲の良かったシリア人の友人アビールに会いたい」という思いを胸に、私の任地でもあったタルトゥースへ行ってきました。実は3年前に婚約をしたという便りと写真が彼女から届いて以来、音信不通になっていたのです。前日に電話をかけてみると、「現在使われていません」のアナウンスが流れましたが、せっかくシリアまで来たのだから、彼女に会えなかったとしてもタルトゥースまでは行ってみようということしか頭にありませんでした。

ダマスカスからバスに乗ること3時間半。地中海に面していて、シリアでは珍しく緑が豊かで、湿気が多いタルトゥースに向いました。バスの中では、アラブの音楽に揺られながら、色々なことを考えていました。アビール以外の友人の名前を思い出したり、途中配られる水に懐かしさを感じると同時に、もしかして彼女は引越して以前の家には居ないのではないかと、タルトゥースがダマスカスの様に町並みがすっかり変わっていたらどうしようかという不安もありました。



地中海に面したタルトゥース

タルトゥースのバス停に着くとすぐ、住所を書いた紙を片手にタクシー乗り場へ向かいました。しかし、タクシーの運転手は「そんな住所は知らない」と首を振った

ので、やっぱり、タルトゥースは変わってしまったのだ...と悲しくなりました。すると、交通整備をしていた警察官や学生らしい人が手助けしてくれ、なんとか住所にある通りまで連れて行ってもらえることになりました。久々のアラビア語で会話をしながら、地中海に面した道を走りました。うっすらと見えるアルワード島も、この時ばかりはあっという間に過ぎていきました。見覚えのある目的の住所の近くで降ろしてもらい、いざ彼女の家を探そう！とキョロキョロしていたところに、偶然にもアビール本人とバッタリ会うことができました。彼女の夫の店の前を通ったタクシーの窓の内側に見えた顔が、私に似ていると気づき、店から出てきてくれたのです。(なんとというタイミングの良さ!)そのまま店の中に招かれ、挨拶の後、彼女や家族・親戚の近況報告を話してもらいました。アビールは結婚し、息子がいて、新

しい家庭を築いていました。



アビールの家族と

当初タルトゥースは一泊の予定でしたが、二泊するように勧められ、その言葉に甘えてアビールの家に泊めてもらいました。彼女が仕事の間は、彼女の家族の家に行きました。10年の間に彼女の家族には卒業・就職・婚約・結婚・出産・死という別れ...などたくさんあり、何も変わっていないのは私だけで、家族から「一体いくつになったの?」と散々聞かれました。(隊員の頃は、「結婚なんてまだ早いわ!」と言えばみんな納得してくれる年齢だったのに...)

人との出会い

今回の旅には、様々な“人”の協力や支えが多くありました。「気をつけていっておいで」と背中を押してくれた家族や友だち、職場の人からの応援。忙しい業務の中、手を休めて笑顔で話しかけてくれたシリア事務所の日本人や現地スタッフの皆さん。そして、突然に訪れた私とともに快く3日間過ごしてくれたタルトゥースの友人たちとその家族。この感動・感激を忘れないように、これからもたくさんの人に出会い、時間を大切に過ごしていきたいと思います。

そして最後になりましたが、シリアで現在ご活躍の皆さんも将来また会いに来ようと思えるようなシリア人の友人を作って日本に帰国されることを祈っています。(やっぱり私はシリアの人や食べ物や国が好きだし、また行けるといいなあ。その時は、美花ちゃん、アビール、またよろしくね!)

話の広場

天鼓 DA DA DA DA-N 来る

信夫 俊子 (SV)

縫製: ダマスカス織維工業専門学校

去る7月25日夜8時からシャランの中央銀行のちかくのレストラン・シャラルルにおいて、大阪の和太鼓グループ、天鼓DA DA DA DA-Nを迎えて、前夜祭レセプションが開催された。

天鼓は、大阪のメインストリート御堂筋の中心にある“難波神社”の夏祭りの呼び物の一つで近くに住む私は、いつも聴いていたもの。聞けば、中近東4カ国歴訪で、シリアは最初の訪問国。彼等は張り切っていました。軽快なリズムと重量感ある響きに圧倒され、感慨も深く、異郷で聴く太鼓は特別な感興を覚え、これは、世界の多くの人々の共感を得ることと確

信したものでした。

本公演は7月27日、夜、...誠に残念なことに、翌早朝7月26日AM7:30のフライトでダマスカスを発つ予定の私は、それを聴くことが出来ませんでした。ロンドンを経て、大阪に帰国した数日後、大阪毎日新聞夕刊に、彼らが、各地で歓迎されている記事が、エジプト、カイロ発で掲載されていたのを見て、国際親善を身近に感じたものでした。エジプトのモスクで演奏したのと同様、願わくば、シリアもウマイヤド・モスクで和太鼓の荘重な響きを、ダマスカスの方々に、ご紹介出来れば、素晴らしいと思いました。



ウマイヤド・モスク、中庭

また、7月25日の同じ夜、ボスラの遺跡で、フルートの演奏会が、開かれたそうです、、、なんと素敵!

シリアには、音楽が実に良く映える遺跡が多く、シリア唯一の国立シリアシンフォニーの若き優秀な指揮者のベルデイのオペラを、ボスラで聴いてみたいものです。これからも、たくさんの良い音楽との、出会いを楽しみに、お仕事に励みたいと思います。

We are on the WEB. See us on www.jica.go.jp. www.jicasr.org

お知らせ

本ニュースレター配信ご希望の方は当事務所まで氏名、メールアドレス、JICAとの関係(所属)を連絡願います。

編集後記

9月末にダマスカス、10月初めにレバノン、エジプトシナイ半島にて爆弾テロ事件が起きました。イラク、パレスチナのみならず、周辺国でも危険度が増してきているように思います。安全に対する注意は万全にし、危険と目される場所には近づかないようにして下さい。シリアの豊富な遺跡と人の良さは変わっていません。訪問者は大歓迎です。(K.N)